

# ルターの聖書講義録<sup>\*1</sup>

竹原創一

## 宗教改革と人文主義

宗教改革者マルティン・ルター（二四八三—一五四六年）の重要なはたらきのひとつはドイツのヴィッテンベルク大学神学部における聖書講義であった。彼は一五一二年一〇月に同大学で神学博士となるとともに同大学神学部教授となり、翌一五一三年五月から、死の三箇月前の一五四五年一月まで三三年間、途中で審問や病のために中断を余儀なくされた以外は貫して聖書講義を続けていた。彼の聖書講義は当時盛んであった人文主義の学問の諸成果<sup>\*2</sup>〔図版1、図版2、図版3、図版4〕を踏まえ、文献としての聖書を原典から理解し、その神学的意味を明らかにするものであった。その方法と内容は伝統を受け継ぎながらも、講義が進められる中で彼独自のものへ変革

\*1 本論は『キリスト教学』第四七号（立教大学キリスト教学会二〇〇五年二月発行）所収拙論「ルターの初期講義録について」に加筆し図版を添えたものである。なお本論での略記方法は、ルター全集ワイマール版をWA、ワイマール書簡版をWAB、ワイマール・アルヒーフ版をAWAで示し、続く数字で、巻、頁、行を示す。また詩編の編数は、ウルガタ聖書とヘブライ語聖書の間で、第九編から第一四七編まで編数にずれがあるが、本論ではルターがあげているウルガタ聖書の編数を記す。

\*2 その成果のうちルターが用いた文献を図版とともに次に示す。



図版1 ニコラウス・デ・リラ『注解付き聖書』(1498年、フローベン発行、チューリヒ大学図書館蔵マイクロフィルム)



図版2 ファベル・シュタピュレンシス『五重詩編』(1513年、ファクシミリ版)

・Lyra, Biblia cum glossis, Textus biblicae cum Glosa ordinaria, Nicolai de Lyra postilla, Moralizantibus eiusdem, Pauli Burgensis additombus, Marthiae Doering reprints 6Bde, Basel, Ioh Pect u Ioh Froben, 1506-1508 [図版1]

・Faber Stapulensis, Quincuplex Ralierum, Galliarum, Romanum, Hebraicam, Verus, Conciliatum, Paris, Henricus Stephanus, 1509 [図版2]

・Johannes Reuchlin, De rudimentis Hebraicis libellus, Pforzheim, Thomas Anshelm, 1512 [図版3]

・Erasmus, Novum Instrumentum omne, Basel, Ioh Froben, 1516 [図版4]

この他、図版を示すことはできないが、ルターが用いた文献として次のものがあ



されていった。彼の改革思想は聖書講義をとおして形成されたが、聖書講義の方法と内容も改革的であった。一五一三年の講義開始から一五二一年のヴォルムス審問による講義中断までの一連の聖書講義、すなわち第一回詩編講義（二五二三年）、ローマ書講義（二五二六年）、ガラテヤ書講義（二五二七年）、ヘブライ書講義（二五二七年）、第一一八年）、第二回詩編講義（二五二九年）において、彼の改革思想は模索され、見出され、確定されていった。宗教改革の歴史的発端とされる『九五箇条提題』（二五二七年）はこの間の出来事であり、宗教改革的認識とされる「受動的神の義」の発見もこの間に起こった。その間の経緯を彼は最晩年の回想文で印象深く述べている（二五四五年三月発行のヴァイツェンベルク版ラテン語ルター全集第一巻への彼自身による序文）。その一連の講義録が様々な形で今日まで残されている。あるものは彼の自筆原稿、あるものは学生の筆記録、あるものは彼の秘書による筆写、あるものは印刷されて出版されたもの（その中には分冊と合冊本とがあり、また講義前に出版されたものと講義後に出版されたものがあり、彼自身の意図によって生前に出版されたものと、意図されず死後に出版されたものがある）として現存する。それらの保管場所はたいいてドイツの図書館であるが、ときにはルターが対決したローマ教皇の膝元のヴァティカン図書館のこともある。また第二次世界大戦中に行方不明になった資料もある。<sup>\*3</sup>

\*3 行方不明になった

本論では、一五一三年の講義開始から一五二一年の講義中断へ至る一連の聖書講義をルターの改革思想の形成過程を示すものとして取り上げ、その過程におけるそれぞれの講義録の形と意味を考察する。とくに講義録が出版されていたか否かは、彼の思想の完成度の指標として、また周囲への影響力の指標として重要な意味をもっている。彼は周囲から講義録の出版を求められ、またみずからも出版の重要性を十分認識しながら、初期においては講義録の出版に対し消極的であった。しかし一五一九年三月の『第二回詩編講義』の出版を転機として、それ以降講義録の出版が積極的に行われるようになる。それゆえ第二回詩編講義は、一連の聖書講義の総括および新しい進展として特別に重要な意味をもつ。

## 第一回詩編講義

第一回詩編講義はルターが神学部教授として最初に行った講義として重要な意味をもつ。その開始の時期については、彼が一五一二年一〇月にヴィッテンベルク大学で神学博士および神学部教授になった翌年一五一三年のある時期と考えられるが、厳密

重要資料として、ルターの第一回詩編講義の準備資料であった『ファベルの五重詩編への注記』があげられる。ルター自筆のこの資料は一八八五年一〇月二一日に発見され、第二次世界大戦開始までドレスデンのザクセン州立図書館に保管されていたが、大戦後行方不明になっている。ただし最初の発見直後の一八八六年に自筆のものが印刷されてワイマール版ルター全集第四巻に収められたので、その印刷版は今日も入手しうる。

な月日は残された資料からは確定されえない。開始時期については三つ説があり、ひとつは講義用資料として印刷された詩編本文の印刷完了日（一五一三年七月八日）から推定された八月一六日説である。当時の暦によれば、八月一五日まで盛夏祭の休日（フンツタークスフェーリエン）であり、八月一六日は夏学期中の講義の再開日であった。それゆえ印刷完了日以後で、休日明けの講義日八月一六日が有力視されてきた。ハインリッヒ・ベーマーは開始時刻まで朝六時と特定している（ベーマー『ルターの最初の講義』五頁）。これに対しゲルハルト・ハマーは、当時の印刷術からすれば、とくにヴィッテンベルク大学専属の印刷業者ヨハネス・グルーネンベルクが小規模な印刷業者であったことを考えれば、二〇〇頁にもおよぶ大部な講義用詩編全一五〇編の本文が一挙に印刷されることは不可能であり、当時一般的であったように分冊で出版された可能性があり、そうであれば全体の印刷が完了した日付以前にも分冊をもってすでに詩編講義は始められていたと推察する。何よりも学期の途中から講義が開始されることは不自然であるとして、結局一五一三年夏学期開始日の五月一日がルターの講義の開始日であると推定する（ハマー、AWAL, 32）。ルターの詳細な伝記を書いたマルティン・ブレヒトは、ルターが一五二二年一〇月に神学博士になった後もお講義開始までに相当長い準備期間を要したとして、第一回詩編講義の開始を詩編本文印刷後の一五二三／

一四年冬学期からと推定する（ブレヒト『マルティン・ルター』第一卷二二八頁）。これらの推定を考慮しながら、ラインハルト・シュヴァルツは講義の開始日を春（一五一三年夏学期開始時）か秋（一五一一／一四冬学期開始時）のいずれかとして断定を避けている（シュヴァルツ『ルター』二六頁）。終了時期は後続するローマ書講義の開始時期との関連で一五一四／一五年冬学期とされる。

第一回詩編講義の主要な資料として、中世の大学における聖書講義の伝統にしたがつて、グロッセ（聖書本文の行間および欄外に記された、文法的小よび神学的語句説明からなる）とスコリエ（聖書本文の各節についてのまとまった神学的解説文からなる）とがある。この伝統的な区分は、第一回詩編講義からへブライ書講義まで続いたが、第二回詩編講義からはグロッセとスコリエが統合される形で払拭された。

### グロッセ「図版5、図版6」

北ドイツのブラウンシュヴァイクの町ヴオルフェンビュッテルの図書館に保存されているゆえに「ヴォルフエンビュッテルのグロッセ」と名づけられている。ルター自

身の手書きによるグロッセただ一冊が残存しているだけで、学生による筆記録は見出されていない。講義者の準備の書き込みと聴講者の書き取りがしやすいように欄外と行間を広くあけて印刷された詩編本文を基に、そこに書き込まれた欄外注と行間注から当グロッセはなる。ルターはグロッセを書き込むに先立って、ラテン語訳詩編本文を、当時の人文主義の学問的成果を取り入れてみずから確定した。また彼は各詩編本文に彼独自の解釈に基づく要約と本文の第一節による表題を付し、さらに詩編本文全体の冒頭に「ダビデの詩編へ、神の子またわれわれの主イエス・キリストの序文」を付した。これら要約と表題と序文を伴ったラテン語訳詩編本文を、彼はヴィッテンベルクの印刷業者ヨハネス・グルーネンベルクに印刷させた。そこで印刷された詩編本文は「ヴィッテンベルクの印刷詩編」と呼ばれる。その印刷本の末尾には、「完。ヨハネス・グルーネンベルクのヴィッテンベルクの印刷所。一五一三年七月八日。アウグステイヌス派修道会のもつで」と記されている。

「ヴォルフエンビュッテルのグロッセ」において、第一編と第二編は欠如している。また第三編の要約と表題も欠如している。それゆえ第四編から以降が原則どおりのグロッセとなっている。本文全体の冒頭の「イエス・キリストの序文」にルターの手書きの注が付されている。さらに当グロッセの裏表紙に、グロッセ全体の原則が、ルター



Praefatio Ihesu Christi  
 filii dei de domini nostri in Plalenti  
 David.

Ego sum offus per me qui tamen falsabitur  
 & ingreditur te egredietur te possum inuenire  
 lob x. Hec dicit Sangois te vens qui habet cla  
 uem David / qui aperit te nemo claudit / claudit  
 te nemo aperit. Apo. 1. In capite libri scriptum est  
 de me plal. xxxix. principio. quia loquor vobis lo  
 viii. propter hoc sciet populus meus nomen meum  
 in die illa. quia ego ipse qui loquor Bar.

Tertius Petrus apof.

Offices prophetarum Samuel & deinceps / qui locuti  
 sunt annuatiuerunt dies istos Act. 3.

Quartus Paulus apof. I. Cor. 2.

Nō indicauit me scire aliqd inter vos nisi Ihesum  
 Christum & hunc crucifixum.

**PRÆFATIO IHESU CHRISTI**  
**filii dei de domini nostri in Plalenti**  
**DAVID.**

Ego sum offus per me qui tamen falsabitur / & ingreditur te egredietur te possum inuenire lob x. Hec dicit Sangois te vens qui habet cla uem David / qui aperit te nemo claudit / claudit te nemo aperit. Apo. 1. In capite libri scriptum est de me plal. xxxix. principio. quia loquor vobis lo viii. propter hoc sciet populus meus nomen meum in die illa. quia ego ipse qui loquor Bar.

Tertius Petrus apof.

Offices prophetarum Samuel & deinceps / qui locuti sunt annuatiuerunt dies istos Act. 3.

Quartus Paulus apof. I. Cor. 2.

Nō indicauit me scire aliqd inter vos nisi Ihesum Christum & hunc crucifixum.

図版5 マルティン・ルター『第一回詩編講義』グロッセ序文 (1513-15年, ルター直筆、ヴォルフエンビュッテル図書館蔵ファクシミリ版)

Omne quod multiplicatum sunt qui turbauerunt  
 d multi in lingua aduersum me. Multi dicunt  
 animes meae: non est salus mea in deo dno.

Tuas die fulgurat cor me: & ius meae & equitas expro  
 meae. Vox mea ad dnum clamauit: & exaudiuit me de  
 aene fano. Ego dixi: non est salus mea in deo dno.

exeresi quia dno fulgurat me. Nō timuimus in po  
 puli eius fidetis me: & dno dno me fac de meo.

Quis percellit oia aduersantes mihi flos caeli & den  
 tes peccatorum, conuulsi. Dni est dno: & super po  
 pulum dno dno sua. Gloria.

**INCREPATIO IUDEORVM**  
 Itera vana sine spiritu qui renitentium /  
 & inuitatio & exhortatio ad Christi  
 suscipiendum Psl. Quartus  
 Timotheus.

Ad Victoriam in organo Psalms David.

Amittite timorem me deus sustinet ex  
 in tribulatione dilatati mihi. Misere mei  
 & exaudi orationem meam. Fili hominis dno.

図版6 マルティン・ルター『第一回詩編講義』グロッセ詩編第3編 (1513-15年, ルター直筆、ヴォルフエンビュッテル図書館蔵ファクシミリ版)

自身の手書きによって記されている。その原則によれば、詩編は「靈によっても理性によっても」歌われなければならないと言われる。グロッセにおいてはまず詩編本文の文字的文法的意味の確定が行われるが、詩編を真に理解するためには、「イエス・キリストの序文」で示されているように、詩編をキリスト論的に解釈しなければならぬ。このように詩編を旧約の歴史的文書として理解するだけでなく、キリストの預言書として理解することが原則として指示されている。その理解は、実際の各詩編の要約および語句の注解において具体的に示されている。

なお当グロッセがルターの手を離れて今日ヴォルフエンビュッテルの図書館に収まるまでの経緯について、ルターより後代の同グロッセへの書き込みの判読によって、次のような推察がなされている (WASS, I, LVII-LIX)。一五四二年夏、晩年のルターから、長らく親交のあったヤコブ・プロプストへ、親交の記念として、このグロッセが贈呈された。その後プロプストはそれをさらに自分の友人ハンス・フォン・ヒルデスハイム (本名フンデマン、出身地ヒルデスハイムにちなんで呼ばれる。WASS, I, LIX) に贈呈した。ところでヒルデスハイムの友人でルター派神学者であったティレマン・ヘスフシウスは、ヒルデスハイムのために、ルターの原本では欠如していた詩編第一編と第二編のグロッセをみずから書き入れて補充した。現在のヴォルフエンビュッテル詩編はこの補

充部分を含んで保管されている。

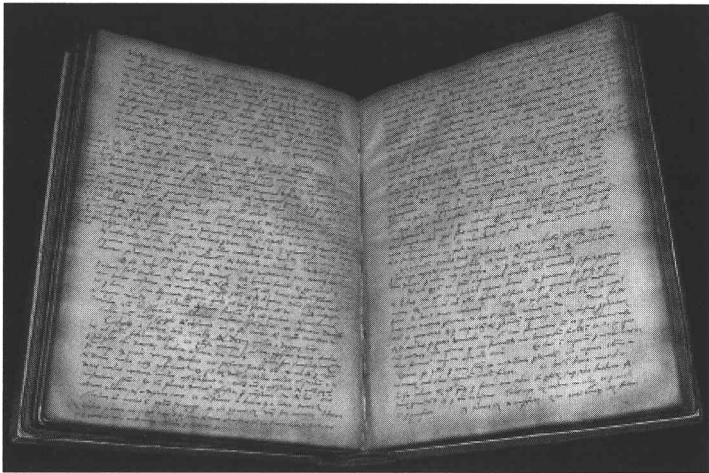
一六四〇年ごろヴォルフエンビュッテルのアウグスト公爵によってルターの第一回詩編講義のグロッセが獲得され、彼の図書館に収められることになった (WASS, I, LX)。

一七四三年に一時このグロッセがハレへ貸し出され、そこで牧師フリードリヒ・エバーハルト・ランバッハによってラテン語からドイツ語へ翻訳されて、ヴァルヒ版として出版された。一七五三年には再びハレからヴォルフエンビュッテルへ戻されたが、すべての冊子は戻らないまま一部行方不明であったが、一九五五年六月八日までにすべての冊子が復帰した (WASS, I, LXII)。そのファクシミリ版がルター生誕五〇〇年記念の年一九八三年に出版された。また印刷されたものとしては、ワイマール版ルター全集の第三卷 (一八八五年) と第四卷 (一八八六年) にグロッセとスコリエが並んで収められている。ワイマール版の校訂新版がワイマール版第五卷第一部としてグロッセだけがまとめられて一九九三年に出版されている (WASS, D)。

## スコリエ「図版7」

ドレスデンにあるザクセン州立図書館に保管されているルターの第一回詩編講義のスコリエ原稿は、その保管地名にちなんで「ドレスデンのスコリエ冊子」と呼ばれている。「ヴォルフエンビュッテルのグロッセ」と同様、スコリエもルター自筆による一冊が残存するだけで、学生の筆記録は見出されていない。

このスコリエ冊子は実際に行われた第一回詩編講義当初



図版7 マルティン・ルター『第一回詩編講義』スコリエ（1513-15年、ルター直筆、ドレスデンのザクセン州立図書館蔵、田所康氏撮影）

の原稿のままではなく、講義後何らかの理由で抜き取られたり、差し換えられたりした痕跡が認められる。それは紙の透かし紋様やインクの変化からも推察される。第一編と第四編のスコリエの大部分は、紙の透かし紋様が他の詩編のスコリエ部分と相違していること、またそこだけ注解が特別詳細になっていることから見て、後年書き直されて差し換えられたと推察される。また第三編のスコリエは欠如し、第六編も後年のものしか残存しない。また第二編は第九節以降、第五編は第五節以降のみのスコリエしか残存せず、全節のスコリエが講ぜられたか否かは確認されない。とくに大きなスコリエ部分の欠如は、第一九編から第二五編まで（厳密には第一八編末尾から第二六編冒頭までを含む紙一帖分）がすっかり欠落していることである。これについてはルターがヴォルムス国会へ召喚されたために第二回詩編講義が詩編第二一編までで中断した後、彼がヴァルトブルク城に匿われていた間に第二二編以降の注解を続けようとして、第一回詩編講義のスコリエのその部分を含む紙一帖分を抜き取らせてヴァルトブルク城へ送らせたが、その途中で失われたのではないかと推測がなされている（AWA1, 35; AWA1, 176）。またスコリエが第一二五編までで終了しているが、第一二六編から第一五〇編まではグロッセだけが講じられ、スコリエは講じられなかったのかも知れない。

第一回詩編講義には学生による筆記録がないのでルターの講義原稿と実際に講じられたものを較べることができないが、ルターの講義原稿と学生の筆記録の両方が残存するローマ書講義を基に判断すると、ルターの講義原稿のうち、グロッセのほぼ全部と、スコリエの約四分の三が講じられたことがうかがわれる (AWAG, 13)。しかしハインリヒ・ベーマーの判断によれば、ルターが第一回詩編講義のために記したスコリエを早口で読み上げても、二年間ではその講義は終了しなかったであろうと言われる (ベーマー『ルターの最初の講義』二八頁)。

第一回詩編講義のスコリエで注目されるのは、第一編のスコリエの後に聴講者へ向けた序文が続くことである。その序文によれば彼がヴィッテンベルク大学神学部で聖書講義をするようにとの「命令」(大学設立者であるザクセン侯フリードリヒ、または同講義の前任者であるシュタウピッツの命令)を受けて講義を始めるにあたり、「なお自分が詩編を十分には理解できていない」こと、その自分が修道士の先輩たちの前で講義することを「重荷」と感じていることを告白している (WAS, 2, 25-27)。その後シュパラティン<sup>\*4</sup>に宛てた一五一六年九月九日付け書簡 (WABr.1, 56) において、この第一回詩編講義を出版すべき命令を受けていること、そのために原稿の仕上げの努力を継続していること、いまだ印刷するまでに至っていないことを述べている。

\* 4 Georg Spalatin  
(1484-1545)、ルターの改革思想に賛同した神学者であるとともにザクセン侯フリードリヒに仕えた役人でもあり、侯と大学の仲

ところでこのルター自筆のスコリエ冊子がどのような経緯を経て、ルター自身から

今日のドレスデン図書館へ至ったかが歴史的に究明されている (WASS, II, XLVII-L)。それによればそのスコリエ冊子は、グロッセ冊子の場合と相違して終生ルターの手元に置かれていた。そして彼の死後のあるとき (一五五四年四月五日のことと伝えられている)、彼の子どもたち (三男一女が生存していた) の間で遺産相続が行われたとき、末子のパウ・ルターにそのスコリエ冊子は渡された。さらにその冊子はパウルの息子ヨハン・エルンスト・ルター (一六三七年一月三日死去) に渡された。彼はすでに生存中その冊子を手放し、一六二八年にはドレスデン図書館の目録に収められている。一八八五／八六年にグスタフ・カヴェローの編集によって、ヴォルフエンビュッテルのグロッセとあわせてワイマール版ルター全集の第三巻と第四巻として印刷出版された。第二次大戦後その冊子は一時行方不明になっていたが、戦後二〇年以上経過した一九六六年春にドレスデン図書館員が、その冊子が他の貴重疎開資料とともに地下倉庫深く眠っているのを再発見した。その保存状態は、洪水の被害を受けたために表紙は損傷しているが、本文自体はよく保たれている。

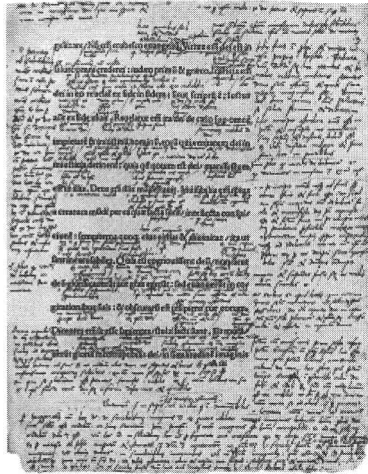
介役を務めた。

## ローマ書講義〔図版8、図版9〕

第一回詩編講義に続いて行われた聖書講義は、パウロのローマ書の注解講義であった。講義の時期としては一五一五年夏学期から一五一六年夏学期までの三学期間が最も可能性が高い (WYAG, 12)。開始時期については、一五一五年夏学期からヴェイツェンベルク大学神学部学生として登録されたヒルデスハイム出身のヨハン・オルデコプの覚え書きによって、一五一五年春に開始されることが知られる。また終了時期については一五一六年九月九日付けシュパラティン宛のルターの手簡から、一五一六年夏学期をもって終了したことが知られる。

同講義の資料としては、グロッセとスコリエからなるルター自筆の講義録（これは長らくベルリンの王立図書館に保管されていたが、第二次大戦中疎開し、今日ポーランドのクラカウ大図書館に保管されている）の他、その講義を聴講した学生の筆記録が五部残されている。



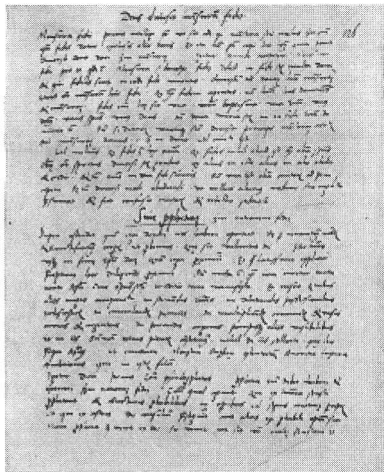


Brno, Státní knihovna 60 listů 60v

A

60, 63, 64r

図版8 マルティン・ルター『ローマ書講義』グロッセ (1515-16年, ルター直筆, クラカウ大学図書館蔵, WA56 巻末)



Brno, Státní knihovna 61 listů 61v

B

66, 68, 69r

図版9 マルティン・ルター『ローマ書講義』スコリエ (1515-16年, ルター直筆, クラカウ大学図書館蔵, WA56 巻末)



Vaticana, Pal. lat. 102 B. 13v

D

Stefano de' Medici, 1. 1. 1.

図版 10 マルティン・ルターのローマ書講義グロッツェ断片 (1515-16年、学生筆記、ヴァティカン図書館蔵、WA57 巻末)



Vaticana, Pal. lat. 102 B. 13v

D

Stefano de' Medici, 1. 1. 1.

図版 11 マルティン・ルターのローマ書講義スコリエ断片 (1515-16年、学生筆記、ヴァティカン図書館蔵、WA57 巻末)

## 学生筆記録 [図版10、図版11]

その五部はそれぞれの所蔵図書館の所在地名にちなんだ資料記号、D (Dessau) のアンハルト図書館蔵)、G (Gotha) 図書館蔵)、P (Palatina Latina) として資料分類されてヴァティカン図書館蔵)、Z (Zwickau) の参事会学校図書館蔵)、S (Stuttgart) の州立図書館蔵) をもって呼ばれている (WA57, XIII<sup>f</sup>)。ルター自筆の講義録と学生の筆記録の両方がそろっているのは、残存する彼の講義録の中でローマ書講義だけである。これによって両者の比較が可能となり、すでにいくつかの研究書も出されている。<sup>\*5</sup> ただしこれらの研究によってもルターの講義録と学生の筆記録との間の本質的、決定的相違は指摘されていない。分量に関しては、学生の筆記録は、ルターの講義録のうち、グロッセのほぼ全部と、スコリエの約四分の三を書き留めている。また学生の筆記録によって、第一学期にはローマ書のはじめから第三章四節まで、第二学期には第三章五節から第八章まで、第三学期には第九章から終わりまで進んだことがわかる。ただし最終章の第一六章については、残された資料によればグロッセだけ著述され、スコリエは著述されなかった。それは第一回詩編講義でグロッセが第一五〇編まで著述されたのに、スコリエは第

\*5 Johannes Ficker, Einleitung zur Edition der Römerbriefvorlesung, WA56, XI-XXXII; WA57, I, XI-LXXVI; Gabriele Schmidt-Laubert, Luthers Vorlesung über den Römerbrief 1515/16. Ein Vergleich zwischen Luthers Manuskript und den studentischen Nachschriften. AW26.

一二五編までで終わっていることと呼応している。

## 出版準備

ルターのローマ書講義の講義録は印刷されないままであったため、その影響力は彼の周辺に留まった。ルターの『ローマ書講義』の邦訳者徳善義和はその解説の中で、『ローマ書講義』には、ルターをして出版に踏み切れないなにかを残していたとも思える」（ルター著作集第二集第八巻『ローマ書講義・上』（6）頁）と述べている。当時出版されたアウグスティヌスやエラスムスのローマ書注解書は広く読まれ、それらについては、一五三九年出版のカルヴァンのローマ書注解でも言及されているが、出版されなかったルターのローマ書講義についての言及はない。他方出版されたルターの第二回詩編講義はカルヴァンに知られ、実際カルヴァンの詩編注解に影響を及ぼしていることが認められる（拙論「詩編解釈をめぐるルターとカルヴァン」、『基督教学研究』第二五号掲載論文二〇〇五年二月発行、参照）。

ルターのローマ書講義の内容について言えば、詩編との関連が深く、たとえばロー

マ書第四章の注解における「罪」の意味の説明で、諸詩編をテキストとして考察が進められている (Was56, 277, 4ff)。また同講義において詩編の引用や参照がきわめて多い。ローマ書講義の直前に第一回詩編講義が行われ、またローマ書講義終了直後から第一回詩編講義の印刷出版をめざした注解の仕上げ作業が行われていたことが一五一六年九月九日付けのルターの書簡から確認される。またこの時期ルターはなお勤勉な修道士であり、日夜詩編のメデイタチオに打ち込んでいた。それゆえ彼においてローマ書の理解と詩編の理解とは同時並行的に進んでいたことは確かである。

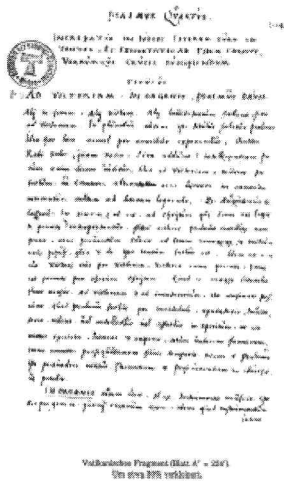
ルターのローマ書講義は彼の宗教改革思想を理解するためにきわめて重要な資料であるにもかかわらず、印刷されなかったこともあって、何百年もほとんど忘れられてきた。ルターの自筆原稿がそれを受け継いだ彼の子どもたちからブランデンブルク侯に一六世紀末に渡った後に、それらはほとんど顧られることなく行方不明同然となっていたが、ルター死後三〇〇年記念の一八四六年に、ベルリン王室図書館において、彼のローマ書講義録が展示された。その後その展示ケースに入れられたまま再び忘却されていたが、二〇世紀初頭にヨハネス・フィツカーがヴァアティカン図書館でルターのローマ書講義の学生筆記録を見出したことをきっかけとして、再びルターのローマ書講義録への関心が高まり、ベルリン王室図書館に眠っていた資料がもう一度眠りから呼び

覚まされた。すなわちフィツカーはルターのその講義録を一九〇八年に二巻本で出版し、さらに一九三八年にはワイマール版第五六巻として出版し、翌年一九三九年にはワイマール版第五七巻としてヴァティカン図書館で発見された学生筆記によるルターのローマ書講義録を、同じく発見されたガラテヤ書講義録、ヘブライ書講義録とあわせて出版した。これらの出版によつてルターのローマ書講義への研究者の関心は一举に高まつた。とくにカール・ホルの「ルターのローマ書講義における義認論、とくに救いの確信の問いを顧慮して」(一九一〇年)などの論文によつてルター・ルネサンスが招来された。ここでは資料の出版がいかに大きな影響をもちえたかが示されている。

### ヴァティカン断片〔図版12〕

ルターからシュパラティンへ宛てられた一五一六年九月九日付け書簡において、ローマ書講義終了後、再び詩編注解に取り組んでいるようすが伝えられている。「シュパラティン様、わたしの第一回詩編講義の出版を期待しないように、あのマルティヌス・メルカトルにわたしに代わつて返答してくださいます。わたし

としてはそれがいつでもあれ出版されることをけっして望まないのですが、しかし  
 いまだ果たしていない命令によってわたしは出版を強いられているのです。ところで  
 今やパウロの講義をすることが終了したので、わたしはこの一つの仕事「第一回詩編  
 講義の出版へ向けた仕上げの仕事」に不断にうち込みましょう。しかしその仕事が終  
 わっても、わたしの立ち会いなしに印刷されうるほど整ったわけではありません。さ  
 らに「ヴィッテンベルク大学の」人文学部の教員たちは、当地の印刷業者「ヨハネス・  
 グルーネンベルク」に印刷を委託することをよしとしています。しかし四旬節以前  
 にはわたしの仕事の印刷はたしかに始められえないのです。このわたしの仕事は（も  
 しそれがどうしても出版されなければならないなら）まずあまり高価でない活字によって印刷  
 されるのがよいとわたしには  
 思われます。というのはいわ  
 しの仕事はしかるべき活字と  
 しかるべき職人のはたらきに  
 値するとは思われないからで  
 す。たしかにそれは弄ばれ、  
 そして拭き消されるにしか値



図版 12 ヴァティカン断片  
 (1516-17年、アウリファーバー筆写、  
 ヴァティカン図書館蔵、AWA1, 483)

しません」(WABr.1, 56, 1-17)。ここではザクセン侯フリードリヒからの命令である第一回詩編講義の出版のために講義録の仕上げの仕事に取り組んでいるようすが述べられている。ここでのルターの課題は、彼がすでに行った第一回詩編講義を出版することである。その課題を彼はまだ果たしていません、またその完遂にほど遠いこと、出版に躊躇していることを率直に述べている。この書簡から読み取られるようにルター自身はその出版に乗り気ではなく、第一回詩編講義がそれに値しないものであると述べている。それは第一回詩編講義のスコリエの序文で、ルター自身いまだ詩編を十分理解していず、自分が講義するに値しない者であり、命令によって講義を課せられることは重荷であると告白していることとつながっている。一五一六年一〇月二六日付けのルターからヨハネス・ラング宛てた書簡では、ルターは自分の当時のはたらきを説明して、みずからを「パウロの講義者、詩編の注解者」と言い表している。すなわち彼は一五一六年夏学期までパウロのローマ書の講義をし、一五一六／一七年冬学期にはパウロのガラテヤ書を講義した。ラング宛ての書簡はガラテヤ書講義に取りかかる前に書かれたものであるが、ルターがパウロの注解講義と同時並行して詩編注解に取り組んでいたことを言い表している。

このように第一回詩編講義と第二回詩編講義の間に行われたパウロ書簡講義と同時



並行して進められた詩編注解が、さまざまな詩編注解断片として残存している。そのような断片として、第一に「ドレスデンのスコリエ冊子」に組み込まれている詩編第一編と第四編の注解部分があげられる。この部分は紙の透かし紋様とインクの色から明らかに第一回詩編講義よりも後の時期に書かれて差し換えられたものであることが確かめられる。第二に詩編第二二編から第二四編までを注解した一群の書がある。これは内容的に前述の第一編および第四編の注解に続く書と見なされる。第三に「ヴァティカン断片」があげられる。この断片は詩編第四編と第五編のグロッセとスコリエからなる。第五編の後に第六編の見出しだけが記されているので、元来は継続の意志があったことがわかる。当資料はルターの自筆ではなく、彼の晩年の秘書ヨハネス・アウリファーバーの筆写による。アウリファーバーはその写本をアウクスブルクの資産家であり図書収集家であったウルリヒ・フッガーの蔵書へ送り込んだ。その後フッガーはプファルツ侯フリードリヒ三世の招きにより蔵書を伴なってハイデルベルクへ引越した。フッガーは一五八四年六月一四日に死去するに際して蔵書をプファルツ侯に遺贈した。こうしてルターの詩編注解断片はプファルツ侯図書館所蔵となった。その後三〇年戦争中の一六二三年にその図書は戦利品としてバイエルン侯マクシミリアンから教皇グレゴリウス一五世へ寄贈された。当時のヴァティカン図書館

司書レオ・アラティウスがアウリファーバーの写本を整理保管したと考えられる。その後ヴァティカン図書館で二〇〇年間以上眠っていた当資料が再び眠りから呼び覚まされたのは、一八九九年春にヨハネス・フィツカーがルターの初期講義録をヴァティカン図書館内で探索してからのことである。彼は学生筆記によるルターの一連の講義録を見出し公表したが、彼はそのうち特にローマ書講義に関心を寄せたため、他の資料は顧られなかった。一九三八年一〇月にエーリヒ・フォーゲルザンクがルターの第一回詩編講義関連資料をヴァティカン図書館内で探索していた折、ルターの一連の講義録の中に含まれていた詩編注解を再発見し、一九四〇年に『一五一八年のルターの第二回詩編講義からの未知の断片』という表題のもとに編集し出版した。フォーゲルザンクは本書解説においてこの「未知の断片」を「ヴァティカン断片」(Vatikanische Fragmente)と命名した。本書表題が示すとおりフォーゲルザンクは、この断片を第二回詩編講義の一部と見なし、一五一九年から一五二二年にかけて分冊の形で順次出版された『第二回詩編講義』に先立つ、実際の講義録と見なした。たしかにこの断片が第一回詩編講義と第二回詩編講義の間の過渡的内容をもつことはその後のルター研究でも認められている。たとえばルターのヘブライ語理解の進展という観点から、第一回詩編講義から第二回詩編講義への詩編解釈の変化を論じた研究として、ジーク

フリート・リーダーの三冊にわたる研究書があげられる。<sup>\*6</sup>しかし次に見るように第二回詩編講義の時期とその独自の意義についてはその後ホルスト・バイントカーなどによって異論が唱えられ、ヴァティカン断片は内容的にはむしろ第一回詩編講義に属するものであり、ルターがローマ書講義後の一五一年秋から一五二七年にかけて第一回詩編講義を出版するために仕上げの努力をしていた中で生み出された詩編注解の諸断片の一つと見なされるようになった(AWVA1, 467-482)。

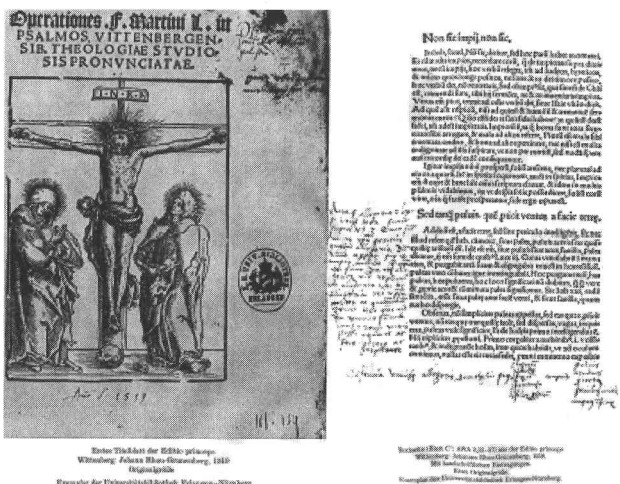
## 第二回詩編講義「図版13」

第二回詩編講義録を印刷して書物として出版する際、ルターはそれに“Operationes in psalmos”という表題をつけた。それは「諸詩編へ立ち入る研究」を意味する。聖書注解の書名として伝統的に用いられていた“interpretationes”「解釈」や“commentaria”「注釈」や“enarrationes”「注解」という表題を彼があえてとらなかつた理由は、自分の書が伝統的な注解書に比肩しうるものではありえないという謙虚さの表明であるとともに、彼独自の新たな方法による注解書であるという自負もあつたからであろう。第二

\*6 Siegfried Raeder, “Das Hebräische bei Luther, untersucht bis zum Ende der ersten Psalmenvorlesung” 1961, “Die Benutzung des masoretischen Textes bei Luther in der Zeit zwischen der ersten und zweiten Psalmenvorlesung (1515-1518)” 1967, “Grammatica theologica, Studien zu Luthers Operationes in Psalmos” 1977

回詩編講義において示された彼独自の注解方法は、当講義の冒頭で次のように言い表されている。「さてはじめにわれわれは文法的事柄を見よう。しかし本当はその神学的事柄を見なければならぬ」(AWA2, 29, 4) 。

まず聖書の言葉の言語学的文法的理解を踏まえた上で、しかし本当に目指すのは神学的理解であることを表明している。そして実際にこの原則にしたがって彼は詩編本文をへブライ語の意味から説き起し、修辭学的語り方を考慮に入れつつ、最終的にその神学的意味へ進んで行く。ま



図版 13 マルティン・ルター『第二回詩編講義』(1519年、グルーネンベルク発行、AWA1, 119;145)

た第二回詩編講義では、その直前のヘブライ書講義までは採っていた中世の伝統的な聖書解釈方法であるグロッセとスコリエに分ける注解方法をもはや採らず、はじめからグロッセとスコリエを統合した仕方での注解を進めている。

## 「文字」から「霊」へ

第二回詩編講義における文法的事柄から神学的事柄へという方向づけは、第一回詩編講義のグロッセの手書き序文に記された「ただ肉によって詩編を歌う」から「霊によって詩編を歌う」への方向づけに対応するものである。第二回詩編講義における文法的事柄はヘブライ語および修辞学の理解に関わる事柄であり、必ずそれを経た上で神学的事柄へ進みうるとされる。神学的事柄を理解しうるのはたしかに霊によるが、しかし霊は文字資料と無媒介にはたらくのでなく、聖書として現前する文字資料の解釈をおしてのみ生じるとされる。

出版された『第二回詩編講義』“*Operazione in psalms*”は、グロッセとスコリエが統合された仕方での詩編第一編から第二編までの注解書と献呈辞と序文とからなる。

それは実際の講義に先立って印刷されたが、はじめから全部が一挙に印刷されたのではなく、一五一九年春から一五二二年夏にかけて六分冊で順次印刷されたと考えられる。

第一分冊はルターからザクセン侯フリードリヒへ宛てられた献呈の辞とルターとメラシヒトンの序文、第二分冊は詩編第一編から第五編までの注解、第三分冊は第六編から第一〇編までの注解、第四分冊は第一一編から第一七編までの注解、第五分冊は第一八編から第二〇編までの注解、第六分冊は第二一編の注解を内容としている。ルターがヴォルムス国会に召喚されたために講義が中断され、またその国会からの帰途彼がヴァルトブルク城に匿われたことによつて講義が途絶えたため、第二回詩編講義は第二一編の注解までで終わった。以上の分冊が一冊子にまとめられたものが今日一六冊子現存し、ドイツを中心とする各地の図書館に保管されている。<sup>\*7</sup>二〇世紀初頭には一八冊子あったが、大戦を経た今日、ベルリン市立図書館およびヴェルトハイム教会図書館に保管されていた冊子が行方不明になっている。一六冊子すべてが全六分冊をそろえているわけではなく、全部をそろえているのはブランデンブルクのカタリナ教会図書館保管冊子とゴータ研究所図書館保管冊子だけである。これらの冊子は一五一九年から一五二一年にかけてヴェッテンベルクのヨハネス・グルーネンベルク印刷所から出版された初版に限られたものであり、その後一五二一年にバーゼルのアダム・ペ

\*7 保管場所は、アムステルダム大学図書館、ベルリン国立図書館、ボンニア大学図書館、ブランデンブルクのカタリナ教会図書館、ハーヴァード大学ヒュートン図書館、クロスタル大学図書館、ドレスデンのザクセン州立図書館(二冊子)、エアラ

トリ社からも出版され、やはりドイツを中心とする各地の図書館に数冊保管されている。さらにその後もバーゼルを中心に版が重ねられた。このように第二回詩編講義に關しては、印刷された講義録だけが残存し、ルターによる手書き原稿や学生による筆記録は見出されていない。それゆえ第二回詩編講義ははじめから印刷された講義録をもつて講義されたと推察される。ただしルターが実際の講義において印刷された講義録をただ棒読みしたとは考えられず、ましてや彼が印刷について誤植はじめ、彼本来の意図と違う点が多くあることを嘆いていることからも（WABr. 185. 5）、彼が講義中に印刷原稿を訂正しつつ、あるときは省略しまたあるときは付加しつつ講義を進めていったと思われる。それゆえ彼が実際に行った第二回詩編講義については、その講義のもとになった印刷された講義録を手がかりに、今日もなお再構成の研究が続けられている。その研究の画期的成果のひとつが、一九八一年にチュービンゲン大学「後期中世と宗教改革研究所」のゲルハルト・ハマー博士によって編集出版された、第二回詩編講義の最初から詩編第一〇編までの校訂版（AWA2）とその歴史的神学的背景についての研究書（AWA1）である。その後、詩編第一一編から第二一編までの校訂作業が進められていて、その近年中の出版が期待されている。

第二回詩編講義の序文にあたるザクセン侯フリードリヒへの献呈辞には、第一回詩

ンゲン大学図書館、ゴータ図書館、リューネブルク図書館、ニュルンベルク図書館、ヴェルトハイムのプロテスタント教会図書館、グイッテンベルクの神学校図書館（三冊子、グイッテンベルクのルターハウス、ヴォルフエンビュッテル図書館、ツヴィツカウ参事会学校図書館

編講義以来その講義録を出版するやうにとの侯からルターへ命ぜられていた課題をついに果たしたという喜びと自信が読み取られうる。このやうに印刷された講義録をもつて講じられた第二回詩編講義は、文法的理解においても神学的理解においても完成度の高いものであった。

## 出版

ルターの聖書講義の開始から中断までの一連の講義録を検討した結果、それが出版されたかどうか重要な意味が含まれていることがわかった。ルターの時代には、彼より約半世紀先立つグーテンベルクによる活版印刷術の発明もあつて、人文主義の學問の諸業績が次々と印刷公刊され、彼もその恩恵に浴することができた。九五箇条題題とその印刷が行なわれた一五一七年以降、彼の著作が徐々に出版されていった。ザクセン侯の命令はじめ周囲からの出版の要請は当初よりあつたが、ルター自身は、著作の内容にもよるが、聖書講義録の出版には慎重であつた。彼が出版に慎重であつたのは、単に当時の印刷の技術的困難さや高価さのゆえではなく、出版による著作の



影響の永続性と広範性のゆえであつたと思われる。彼が聖書講義の初期において、なお聖書の理解に不確かさを抱いていた間は出版に対して消極的であらざるをえなかつた。彼自身が聖書の新たな理解に確信をもつようになった一五一九年から聖書講義録の出版に積極的になつていった。その転機が一五一九年三月の第二回詩編講義録の出版であつた。<sup>＊8</sup> 第一回詩編講義と第二回詩編講義は、単に時期的に前後する二つの異なつた講義というのではなく、第一回詩編講義以来ずっと懸案であつた講義録の出版という課題が果たされたところで第二回詩編講義がはじめられたという、出版をめぐる両講義間の相違と連続性に注目しなければならない。

＊8 ガラテヤ書講義録についても詩編講義録と同様の進展が見られる。すなわち一五一六／一七七年冬学期に講義されたガラテヤ書講義録がその後書き改められて、一五一九年に『ガラテヤ人たちへのパウロの書簡への注解』(『*epistolam Pauli ad Galatas commentarius*』)として出版された。